

韓国初期叙事作品のジャンル特性について

崔 在佑

1. 問題提起

韓国の古小説研究者の間で、初期叙事作品¹についてのジャンル認識は、混乱している状況だといえる。同じ作品が説話である場合もあり、伝奇である場合もあれば、小説—伝奇小説—である場合もあるからだ。ジャンルを規定することが、単純に作品を分けることに限らず、その作品の特性を明確にすることで、文学史の構図を正確に認識させてくれる意義があるとすれば、研究者によってジャンルが異なってしまう状況は、早く解決しなければならない問題である。

韓国の初期叙事作品の中で、いくつかの作品は、最近その小説性が注目され、ジャンルの問題における深度のある論議が行われた。その対象作品としては、〈崔致遠〉〈調信〉〈金現〉が挙げられるが、ほかにもいくつかの作品が追加されることもある。²これらの作品は、初期研究者には説話として扱われたものだが、90年代に入り、小説的な面貌が多様に分析され始め、一部の作品は、ほとんど小説として位置づけられるようになった。

しかし、ここで対象とする作品を小説として位置づけるのには、もう少し考えなければならぬところがあると思われる。従って、本稿では韓国の小説の起源を論ずるときに代表的に挙論される〈崔致遠〉〈調信〉〈金現〉を対象に、ジャンル論に立脚し、その作品のジャンルの特性をもう一度察してみる。³

ジャンル論に立脚した論議を通じ、これらの作品を伝奇として位置づけた研究者として、李大炯が挙げられる。李大炯は、韓国初期作品を対象に人物・構成・時空の性格などを基準として取り上げ、緻密なジャンル論を展開した。しかし部分的に認めるべき結果を出しているものの、全的に同意するには疑問が残る。たとえば、伝奇の人物を日常の人物と奇異な人物に分け、その特性として、日常の人物は媒介的な役割をし、奇異な人物は主導的な役割を担っているとみなす点、日常の人物と奇異な人物が出会う事件を経験した後、奇異な人物に前提されていた願望が解消されるとみなす点などを、疑問点として指摘できる。

本稿では、人物の性格と葛藤構造、そして叙事話者が主人公に焦点を固定させる形象を中心に分析が行われる。叙事は事件を軸に展開され、又その事件の中心には人物が置かれているとするならば、人物の性格はその作品の特性を本質的に規定するはずである。葛藤構造も、叙事作品の核心要素として理解されている。これらと同時に‘焦点化対象’が男性主人公に固定されている様子を確認する。このような基準をもとにした分析作業により、対象作品の形象の特性が‘自我と世界との相互優位に立脚した対決’を追求する小説の核心特性とは、そのジャンル徴表を異にしていることがわかる。

2. 韓国初期叙事作品のジャンル特性

小説は、近代文学の代表的なジャンルの一つでもあり、今もその領域を広げていく発達

進行中のジャンルでもある。⁴従って、小説の特性が何かを一言で定義するのは、非常に難しい。しかし、それなりに小説の核心を指摘していると思われる、多様な研究が成し遂げられてきた。その中で、趙東一が‘自我と世界との相互優位に立脚した対決’を小説のジャンル徴表として取り上げたのは、正鵠を得たといえる。⁵この命題には、叙事ジャンルを規定しようとするとき、念頭に置くべき核心が含まれている。‘自我と世界’は主に‘人物’で具体化され、⁶‘相互優位に立脚した対決’は‘構造’として現れるからである。そうであるならば、自我と世界が相互優位に立脚した対決を行う形象を抽出し、そのような形象が一群の作品に共通的に存在することを明らかにすることができれば、その作品群は別のジャンルとして分化させてもよいだろう。⁷

2-1. 人物関係の‘半社会性’と‘存在的な変化’

韓国の初期叙事作品は大体、とある‘奇異なる出会い’を題材としている。その出会いは、日常的な人物と非日常的な人物が出会いの主体となる。⁸そして、日常的な人物である主人公は、この出会いを通じて、存在的な変化を経験する。⁹この出会いの過程が‘半社会性’を持っていることと、主人公が体験する‘存在的な変化’が、小説とは区別されるジャンル徴表として機能する。

‘半社会性’は、社会性の次元が異なる二つの主体が出会い、お互いに自分達だけの時空の中での事件を経験した後、日常的な存在である主人公が自分の世界の次元でも意味のある変化を体験することから抽出された概念である。非日常的な人物は、日常的な生活の範囲の中では、主人公が直接関係を結ぶことができない存在である。このような存在が、何のきっかけもないまま、自分の一方的な必要によって突然現れ、¹⁰社会的な関係が整合的に形成されていない状況の中で、主人公と出会う。

非日常的な存在の突然なる出現は、事件の重要な契機であり、且つ次の展開の出発点となる。この突然なる出会いは、主人公を変化させるが、この変化には二つの共通点が見られる。一つは、出会いの時間が全生涯から見ると‘短い時期’にすぎないにもかかわらず、その経験が主人公の‘全生涯に影響をおよぼす’ことで、もう一つは、変化した後の主人公が出会いの以前とは別の存在となることである。韓国初期叙事作品では、人物の全生涯の短い時期に起きた事件に注目する構成を取りながらも、変化の結果は、その人物にとって甚大であり、且つ全生涯をかけている形象となっていることである。¹¹

叙事作品の中の人物は、事件の展開過程を通じて変化することもあれば変化しない場合もある。しかし、小説の中の人物における変化は宿命ともいえる。小説は、問題的な世界に立ち向かい、どうであろうとも自分の状況を変化させていく人物を描くことを本然の任務としているからである。そういっても、小説の人物は、様々な経路を通じて、すでに提供された情報に基づき、蓋然性を破壊しない範囲の中で変化を追求する。蓋然性を喪失して突然な変化を見せることにより、読者を面食らわせる人物であれば、特別な場合を除き、小説的な人物だとは言い難い。読者が知っている情報に基づいた人物の性格と蓋然性が排除された変化の間に、一定な整合関係が成立しないので、読者が‘面くらい’を感じるよう

になるからである。

これからは、作品を対象に論旨をより具体化させよう。〈崔致遠〉の叙事の核心は、崔致遠と二人の女鬼との出会いに置かれている。二人の女鬼が崔致遠の前に現れた理由は、彼が歴史上の人物であることよりは、自分達の墓に詩を書いた人物だからである。¹²しかし女鬼は、崔致遠とは五百年の歳月を隔てて存在した人物なので、¹³作品内的に社会的な関係が全く形成されていない。女鬼が鬼神であるか否かは、あまり重要なことではない。ジャンル特性としての問題は、社会的な関係から離れた次元で、彼らの関係が突然成されることに置かれている。

自分の世界の中で日常的な生活を過ごしていた崔致遠の前に二人の女鬼が突然現れる。そして二人は、¹⁴自分達が抱いていた内面を詩を媒介に出会い、通情することになる。彼らがお互いに感じる心は、悲壮な雰囲気すらある。¹⁵彼らが出会う過程をみれば、遊び心まで感じられるが、¹⁶このような気軽さが急に悲壮なトーンに変わり、お互いを渴望することになる。このようなトーンの変化は、作品の質的成就の可否はさておき、主人公の変化と関係のあるこのジャンルの特性と連繫されていることを指摘することができる。突然に始まった二つの主体の一時的な出会いが、生涯を貫通する変化を担保するためには、何らかの心情的に深刻な内面を主人公に作りこめなければならなかったと思われる。また非日常的な存在との突然なる出会いは、日常的な人物である主人公に愛を経験させ、存在的に変化させるきっかけのために意図されたことだと考えられる。常に出会うことができる日常的な人物との出会いなら、急に人物の性格に甚大な変化をもたらすことはまずないだろう。

〈金現〉は、金現と虎女との出会いが叙事の核心である。金現が興輪寺の塔の周囲を回っていたとき、虎女が接近して通情する。¹⁷‘新羅風俗に、毎年仲春になると、八日から十五日まで都の男女が競って興輪寺の殿塔を回る福会を開いた’¹⁸という作品内の情報があるので、金現の行為は、当時の社会一般の慣習に該当すると思われる。日常生活を過ごしていた金現に、全く予期もせぬ一人の女人との出会いが成される。女人の正体は虎である。人と虎との出会いから現実的な社会性が獲得できるはずがない。¹⁹そして、この二人は自分達だけに許された時空の中で愛を経験し、それをきっかけに金現に変化が現れる。金現がどんな人物かは作品内的に情報が皆無である。虎女が金現を選んだことをもとに推してみれば、虎女の願いを成し遂げさせる能力を持っている人物であることは分かる。しかしながら構造の側面からみれば、この二人の出会いは、社会的な関係の中で行われたとは言い難い。出会いの後、金現は、虎女の犠牲をきっかけに、社会的な意味のある変化を体験する。虎女を殺した償いで出世することがそれで、唯唯自分の願いを祈るしかできなかった存在が国家の権力者集団の中に入ることになるのである。その後、金現は、虎女のために虎願寺という寺を作り、殺身で自分の出世を成し遂げてくれた虎女に恩返しする。²⁰作品の内容から、このような状態が生涯続けられることが推測される。次元を異にする人物との突然な出会いと愛(半社会性)、そして何日間の出会いが全生涯を通じて持続する変化を招く契機になる(存在的な変化)という点から、〈崔致遠〉と同じ特性が抽出できる。

〈調信〉は、調信と金氏女との出会いが叙事の核心である。この作品は、非日常的な人物

が外形上、日常的な外皮を被っている点から、前述した作品とは類型の差を見せる。しかし、金氏女が観音の化身であると推測できるので、²¹ この出会いが社会的な関係を超えた事件なのは明らである。非日常的な人物の金氏女は、調信の内面に存在していた人物であって、実際に調信が彼女を片思いしたかどうかは確実ではない。出会いと恋までが観音の化身である金氏女の意図に過ぎないかもしれないからだ。ともかく調信は、莊園の責任者として赴任した後、同じ町に住んでいる金氏女を片思いする。その状況の中で彼女が調信の夢に突然現れ、結婚生活が成し遂げられる。

この経験をもとに調信は、全生涯にかけて変化した生を暮らしていくことになる。莊園の責任者であるにはあるが、女の問題で葛藤する平凡な人間の姿をもつ僧侶が、得道した存在に化けたわけである。つまり観音の化身と推測できる金氏女の意図の下で設けられた夢という仕掛けの中で、調信には結婚生活と別れが行われ(半社会性)、それを通じて以前とは異なる、即ち内面の葛藤が解消され、完全に仏僧という自分の本分に忠実な存在に変貌したまま(存在的な変化)一生を終えるようになる。

2-2. ‘非葛藤叙事’と‘持続不可能な共存’

韓国初期叙事作品のジャンル特性として取り上げられる又一つの徴表は、‘非葛藤叙事’と‘持続不可能な共存’である。非葛藤叙事とは、自我と世界との葛藤が、核心的な事件として具体的に形象化されておらず、又葛藤状況に置かれても多様な仕掛けが設けられ、葛藤を回避することを意味する。葛藤とは、構造の中に絡ばれている対立と闘争の関係を示す概念で、小説の核心徴表ともいえる。韓国初期叙事作品は、葛藤を核心的に扱わない点からも、小説として規定し難いと思われる。作品の中で、人物の両価感情や価値観の衝突を見せる場面は、殆ど存在しない。無論、葛藤を招きやすい状況はいくらでも指摘できる。実際に葛藤の状況が表出されることもある。しかし、そのような葛藤が、直接人物を通じて、問題的な地点として浮かび上がることや、作品の構造の中で核心的な位相を占めることは稀である。²²

〈崔致遠〉で自我といえる人物は崔致遠である。崔致遠には世界として機能しながら、自分自身も自我である二人の女鬼も取り上げられる。この二つの自我は、基本的に自分が存在している世界と葛藤の関係に置かれている。“致遠は海島の微賤な胎生であり、俗世の末端官吏である。”²³ のような発話を考えてみると、能力のある自我と自分の能力を思い切り発揮できない世界が、葛藤の関係に置かれている可能性は十分考えられる。しかし、このような状況は、葛藤を誘発させる可能性として存在するだけで、事件の展開の中で直接、葛藤を起こす様子は回避される。

二人の娘子²⁴の状況も崔致遠と違いがない。二人は、地方の土豪として東山のように富を享受し、金谷のように奢侈を張ることができる、父親の下で育てられた人物である。しかし八娘が十八歳、九娘が十六歳になったときに、親から強制的に塩屋と茶屋に嫁入りさせられる状況となり、雰囲気急転する。この状況を変えようと努力するが、結局は自分たちの願いを成し遂げられず、夭折してしまう。²⁵ その当時に二人が感じていた葛藤がどれ

くらい深刻なものだったかは、十分推し量られるが、深刻な葛藤は、ただ崔致遠との出会いを可能にする一女鬼となる一条件としての機能に留まる。二人の娘子が置かれていた状況が当時の中国の社会像をリアルに反映しているといえども、問題は変わらない。崔致遠とは五百年の差がある大昔の状況が、五百年後の人物である崔致遠に意味のあることを齎すはずがないからだ。二人の娘子を死に至らせた状況が作品内的に担っている機能と、崔致遠との出会いに整合性を与えることに置かれておらず、二人の死が無念だったことだけを見せる根拠に限定されるだろう。²⁶

〈調信〉に描かれている人物の間の葛藤状況は、作品の主人公である調信の個人的な側面から考えるとき、〈崔致遠〉より深刻な内容が含まれているといえる。彼は僧侶の身分で、一人の女人に片思いする。莊園の責任者として赴任してから、太守金昕公の娘を恋することになり、何回も洛山大悲の前に行き、彼女との縁が結ばれるように祈ったが、結局彼女は他のところへ出嫁してしまう。深刻な行動が展開されてもおかしくない場面だと思われるが、作家は、調信を大悲の前で自分の願いが成し遂げられなかったことを怨望しながら、悲しく泣き転寝することで、その状況を終結させる。²⁷ 大悲の前で怨望しながら泣くことが、僧侶の調信にとっては最高のレベルで表現された内面葛藤の表出だと読むこともできるだろう。しかし、作品はこれからが始まりであり、それが夢であることを考えると、怨望しながら泣いたことに意味が置かれておらず、調信の得道のため、大悲の前で転寝するように作ったところに作家の意図があったと理解するべきだろう。

調信は、夢の中で金氏女と出会い、四十年をも生活し、五人の子供まで生む。しかし、彼らの生活は苦しさの極みで、家は四つの壁だけであり、糧にも困る生活の連続である。このような渦中に長子が飢えて死ぬ。さらに夫婦も老齢で病気もあり、10歳の女兒が食べ物を物乞いしてぎりぎり生活していく。その女兒までもが犬に噛まれ、痛みを訴えながら横たわるようになると、状況は急に反転される。婦人の提案により、お互いに別れを迎えるようになることである。各自が子供二人ずつを連れて行くことになり、調信が‘南のほうに行ってください’という妻の言葉のとおり旅立とうするとき、夢から覚める。²⁸ そして、妻の提案により、その状況は葛藤なしで終結される。²⁹ このような状況を描くにおいて、作家は、人物の内面から起こる葛藤や人物の間の葛藤には焦点を置かず、苦しい形象をそのまま描くことだけに集中する。

〈金現〉にも、‘金現と虎女’、‘虎女とお兄さん’、‘虎女と上帝’の間に葛藤をもたらしやすい状況が存在するにはする。しかし、その葛藤の状況は、前の作品と同様に、叙事の核心として機能しない。葛藤の形象は、話者の発話を通じて断片的に提示されるだけに止まり、その葛藤状況も金現の変化－内容としては金現の出世－に向けて解消されてしまう。

非葛藤叙事と関連し、人物の関係を作る方式も初期叙事作品の特性として指摘できる。それは、主人公と相手である非日常的人物との関係についてのことである。今までの分析により、これらの作品では、主人公が世界と葛藤を嘗めている状況に置かれているといえども、非日常的人物との出会いを通じ、その葛藤が解消されることが分かった。そうであれば、主人公の葛藤解消の切っ掛けとなる役割をする非日常的人物が、主人公と葛藤を起

することができないのは言うまでもないと思われる。とある人物が他の人物の葛藤を解消してくれるためには、その二人の関係が同質的な価値を基にしていなければ不可能であるからだ。このような意味で、二つの人物は共存するという概念を適用することができるだろうが、実際には作品の中では最後まで共存する様子で形象化されることはない。非日常的な人物は、作品内的にいくら大きい割合を占めていても、日常的な人物の変化と同時に舞台の外に退けなければならない運命を持っている存在である。作品の特性として指摘できる、このような形象を‘持続不可能な共存’として概念化する。

2-3. 焦点化対象の固定

韓国の初期叙事作品の特性として指摘されるもう一つの徴表は、焦点化対象の問題である。³⁰ 焦点化とは、一つの認識の主体が、とある対象に向けて自分の知覚を送り、それを認識する行為を指す用語である。³¹ どんな叙事物にあっても、話者は、自分が語っている事件や自分が描いている作中人物、そして自分が作品に込めた思想と感情に対して一定な態度を選んでおく。そうすれば、話者が注目し、作品の中に描いているのは、このような選択と関連して叙事の展開に非常に重要なことを示唆するといえる。

韓国の初期叙事作品は、世界との葛藤に無関心な態度をとっている代わりに、主人公に焦点を固定する。話者が注目する焦点化の対象が主人公に制限されるという意味である。主人公以外の人物に焦点が割り振っている場合は、その対象の形象を描かず、単純な叙述に止まる。人物の間の葛藤と対立が叙事の核心となるためには、主人公以外に対立している相手も焦点化の対象とし、葛藤が深刻に展開される形象を見せなければならないにもかかわらず、韓国の初期叙事作品では、そのような形象を見付けることができない。このような点からみると、焦点化の対象を主人公に固定させたのは、非葛藤叙事を重要な特徴とする作品の全体構造を考慮した作家の認識の中から得られた当然な結果だともいえる。

〈崔致遠〉は、お互いに別の次元で存在していた二人の人物の出会いと別れを外部の話者の目で叙述する。この話者の焦点は、二つの位置に置かれる。二つの位置は、各々相違な役割を分担しているように見えるが、位置の分離は機能上の分離だけであり、焦点が主人公から離れることのない点では同じである。³² まず、話者が作品の内部の世界とは相当な距離³³を確保している位置から叙述する場面が取り上げられる。³⁴ 話者は、この位置から、主人公の崔致遠についての具体的な情報を提供してくれる。この情報は、非常に具体的であり正確なものでもある。話者は、作品のはじめと終結部分に崔致遠についての情報を提供して置くことで、作家が意図している方向を読者に提示する機能を遂行する。その情報は、作品で叙述されている‘女鬼との出会いと恋’という事件の基本的な性格と共に考えてみると、そんなに本質的ではないともいえるが、歴史的な人物の崔致遠を作中に直接導入したことを考慮すると、読者に事実性を認識させる役割をしていることは考えられる。³⁵ しかし、このような情報の提供は、あくまでも主人公に限られる。本稿で、対象作品の作家が関心を主人公に集中しているとみなす理由は、このように作家の任務を委ねられた話者が、重要な情報を提供する人物を制限しているからである。

もう一つの話者の位置は、話者が具体的に人物の世界に近寄ってきた場面が挙げられる。³⁶ この位置の話者は、至近距離から人物の状況を叙述する。しかし、細かい部分まで全知的に介入してはならず、一定の距離を維持する状態から、状況を伝達することに集中する。話者は、自分の声を最大限に抑制したまま、作中人物が作家が意図的に設定した価値を遂行するためにどのような行動をしているかを、描写を中心に見せてくれる。

小説とは、作品の内的世界が作品の外的世界を積極的に反映することの特徴とするジャンルである。作家は、自分自身が問題化していた外部世界から主題をとるとき、指向する価値とそうではない価値を意図的に裁断する。そして注目すべき価値は主人公に、他の副次的な価値は他の人物や世界に投影させて描く。³⁷ 自我と世界は、どちらも一方的な優位を占めさず、対立する様子で形象化される。所謂、‘自我と世界との相互優位に立脚した対立’である。小説を始め、叙事作品では、このような形象が話者を媒介に展開される。その中で小説の話者は、二つの主体－主人公と彼と対立する世界－の相互優位に立脚した対立関係のため、二つの主体に共に叙述の一定部分を割愛する。どちらかに一方的に焦点が集中されては、満足な対立関係を現すことができないからである。しかし、〈崔致遠〉の話者は、主人公以外の部分を焦点化対象として注目せず、ひとたび注目した対象を一元的に描いている。³⁸ 韓国の初期叙事作品の作家にとっては、自分が伝えたかった事件を主導的に引っ張っていく主人公だけが大切であり、それと相反する価値は、対比的に形象化するくらい大切ではなかったと思われる。³⁹

焦点化対象が主人公に固定されている様子と関連し、その焦点化対象が男性である点も指摘されなければならない。韓国初期叙事作品の主人公は、例外なく男性であり、女性は主人公の相手の役割に留まる。女性も重要な役割を行っている場合があるにはあるが、‘存在的な変化’というジャンル徴表と一緒に考えるとき、その中心には、いつも男性主人公が置かれている。異例的に〈調信〉の場合には、金氏女が重要な役割を遂行し、全体的な叙事の流れも金氏女の発話が重要な切っ掛けを提供しているが、金氏女は主人公ではない。主人公とは、作家が一次的に注目する人物であり、全体の事件を通じて集中的に描かれる人物でなければならない。叙事の展開過程の中で多少受動的な立場におかれることがあるとしても、〈調信〉で作品全体を貫通して注目されている人物は調信だけなので、調信以外の人物は、主要人物としては想定できるといっても主人公として見なし難しい。

3. 結論

これまで、韓国初期叙事作品を対象にジャンル特性を調べた。既存論議で説話か伝奇、或いは伝奇小説として規定されてきた作品が、実は、小説とは弁別される特性を持っている点を取り上げ、その特性を三つの側面に分けて論議した。

まず、人物の特性として人物関係の‘半社会性’と主人公が経験する‘存在的な変化’について言及した。分析した作品では、社会性の次元を異にする二つの主体が突然出会い、その出会いを通じて主人公は、残っている生涯を掛けた甚大な変化を体験する。又、その変化は、主人公が住んでいた世界、つまり日常的に意味のある変化であったことが分かっ

た。そして、この‘突然なる出会い’と‘日常的な意味のある変化’を‘半社会性’と‘存在的な変化’で概念化し、ジャンルの特性として指摘した。構造の特性としても二つを指摘した。自我と世界との対決に焦点が置かれておらず、葛藤を回避する様子を見せている点を‘非葛藤叙事’と規定し、二つの人物の関係が存在的次元を異なっていることにより、最終的には日常的に共存する様子で描かれない点を‘持続不可能な共存’と概念化した。最後に、対象作品の話者は、‘焦点化対象を男性主人公に固定’させていることを確認し、このような形象は、‘自我と世界との相互優位に立脚した対決’を追求する小説の形象とは、異なる特性であることを明らかにした。

これからは、本稿で調べたジャンル特性を基とし、次の時代の作品についてのジャンル論議を進行していくべきだろう。初期叙事作品の分析と共に次の時代の作品のジャンル特性を明らかにしようとするこのような作業が、ジャンルを分ける場でより精密な基準を作りだし、韓国のジャンル構図に意味のあるきっかけを提供することができるようになることを期待してみる。

注

- ¹ 本稿での初期叙事作品とは、研究者によって‘傳奇’である場合もあり、‘傳奇小説’である場合もあるが、基本的には説話とは区別されるものと認識されている作品を指す。具体的には、羅末麗初から『金鰲新話』が創作された時期までの作品である。‘初期’と言ったのは、時期的に先立っているという意味と共に作品が質的に高くないことを含めようとする意図である。また‘作品’とは、一般的に言われるテキスト一般を指すことではおらず、個人創作を念頭に置き、意図的に創作されたものを意味するため使った用語である。
- ² 朴逸勇は既存論議を検討し、伝奇または伝奇小説として挙論される羅末麗初時代の叙事作品には、〈崔致遠〉〈調信〉〈金現〉〈南白月二聖〉〈圓光西學〉〈溫達〉〈薛氏女〉〈都彌妻〉〈白雲際厚〉〈首挿石柁〉〈金遷〉〈蓮花夫人〉などがあると述べ、その中で伝奇または伝奇小説として分類された頻度がもっとも高かったのが〈崔致遠〉〈調信〉〈金現〉だと指摘している。朴逸勇、「小説史の起点とジャン性論議の成果と課題」、『古小説研究』24、韓国古小説学会、2007、9～10頁。
- ³ 初期叙事作品のジャンルを小説として見なしている代表的な研究者として林煥澤と朴熙秉が上げられるが、これらの研究者が立てたジャンル基準について批判的に検討した論議がある。崔在佑、『企齋記異の特性と意味』、博而精、2008、47～49頁。
- ⁴ ここで発達進行中という単語を使ったのは、小説の質の問題ではなくそのジャンルとしての変化が今も進行中であることを指摘するための概念語である。
- ⁵ 趙東一は、‘自我と世界との対決’という枠を通じ、叙事作品のジャンル特性を規定するとき、小説の特徴を‘自我と世界との相互優位に立脚した対決’と規定した。趙東一、『韓国小説の理論』、知識産業社、1977、104～132頁。
- ⁶ 世界は、人物としてその姿を現さず、背景だけの機能にその役割が止まる作品もある。
- ⁷ 本稿の対象作品が説話とは異なるという事実は、すでに多くの研究者によって指摘されてきたので、別に言及しない。ここでは既存研究での、‘説話ではなければ小説である’と主張するところに問題点があることだけを指摘しておく。
- ⁸ 韓国の初期叙事作品の人物としての日常的人物と非日常的人物の特性は、以下の本文の内容から分かると思うが、より具体的な概念は、次の論文が参考できる。崔在佑、『企齋記異の特性と意味』、博而精、2008、51～54頁。
- ⁹ 人物の変化は、ジャンルの特性を判別する大切な要素である。朴熙秉は、〈崔致遠〉を分析するとき、“二人の女鬼との出会いと愛をきっかけに崔致遠の生が大きく変わり、その生に新たな転換がもたらされる。”と述べた後、これは“最初の時間と最終の時間の間に大きい質的变化”があるので、“時間概念にあっても〈崔致遠〉は、小説であることが確認できる。”と主張した。朴熙秉、「韓国古典小説の發生及び發展段階をめぐるいくつかの問題について」、『冠岳語文研究』17、ソウル大学国語国文科、1992、37頁。

- ¹⁰ 例えば、次のように叙述されている。①是時、月白風清、杖藜徐步、忽視一女。(〈崔致遠〉)②俄成假寢。忽夢金氏娘、容豫入門。(〈調信〉)③元聖王代、有郎君金現者、夜深獨遶不息、有一處女念佛隨遶、相感而目送之。(〈金現〉)以下の引用文を含め、本稿に引用されている文は、次の本を参考にしたものである。金賢陽 外、『殊異傳逸文』、博而精、1996。(〈崔致遠〉と〈金現〉)一然著、李民樹訳、『三國遺事』、乙酉文化社、1992。(〈調信〉)
- ¹¹ 事件の展開と人物の変化がこれらの作品と似ている形象をしているにもかかわらず、人物の変化が生の一部分に限られている形象をしている作品があれば、その作品はこれらの作品とは異なるジャンルの可能性が高い。
- ¹² 作品の内容は、次のようである。“致遠題詩石門。(中略)‘往來誰顧路傍墳/鸞鏡鴛衾盡惹塵。’”崔致遠の詩をきっかけに届いた女鬼の答詩の内容を通じてこのような推測ができる。他にも、あえて作品からその理由を探してみると、女鬼の発話から、“所冀仁賢、勿萌猜嫌。”くらいが上げられる。或いは、“往來誰顧路傍墳/鸞鏡鴛衾盡惹塵。”のような、自分達の墓に詩をつけてくれたことに感謝する気持ちで作った、詩句が上げられると思われる。ともかくも根拠としての理由がこれくらいなら、作品の中の崔致遠を歴史的な人物と同一視して人物の意味を探そうとした既存研究は、無理があると指摘できる。
- ¹³ 二人の女鬼の詩の中に次のような句節がある。“五百年來始遇賢、且歎今夜得雙眠。”これを通し、二つの主体の出会いが、500年の時差のある存在たちの出会いであることが分かる。作品の内には、崔致遠が二人の女鬼が存在していた時期を知っていたという情報が皆無なので、二人の女鬼の詩ではなく崔致遠の詩を通して情報が提示されるのは、自然な形とは考えにくい。このような形象は、時間の大切さをあまり認識していなかった伝奇ジャンルの限界が現れた結果だともいえるだろう。
- ¹⁴ 実際は三人であるが、作品の人物としての役割を考えたとき、二人の女鬼は一人だと見なしても良い。
- ¹⁵ 例えば、‘祝禱千靈與萬神。’及び‘今宵若不逢仙質 判卻殘生入地求’のような、二人の女鬼に送った崔致遠の詩が上げられる。しかし、このような発話は、悲壮な雰囲気醸すまではいえるといえども、悲壮美までには昇華されることはない。
- ¹⁶ 崔致遠が翠襟に行く“乃問其女名字、曰翠襟。公悅而挑之。”のような句節から指摘できる。
- ¹⁷ 夜深獨遶不息。有一處女念佛隨遶、相感而目送之、遶畢、引入屏處通焉。
- ¹⁸ 新羅俗、每當仲春初八至十五日、都人士女、競遶興輪寺之殿塔、爲福會。
- ¹⁹ 虎を当時新羅社会の中心勢力に抵抗的・反体的な勢力として理解した見解もあるが、ここでは社会性を獲得しているかそうではないかの側面から作品の内的存在の形象だけを問題とする。林熒澤、「羅末麗初の傳奇文學」、『韓國文學史の視角』、창작과비평사、1984、16頁。
- ²⁰ 現既登庸、創寺於西川邊、号虎願寺。常講梵網經、以導虎之冥遊、亦報其殺身成己之恩。
- ²¹ 〈調信〉は、『三國遺事』‘洛山二大聖 觀音・正趣 調信’条に載せられている。この条の三つの話は、すべて観音と繋がりのある話である。
- ²² 日常的な人物と非日常的な人物との間の非葛藤関係は、‘相補的な対立関係’という概念として理解されている。李大炯、『金鰲新話叙事方式研究』、延世大學校博士學位論文、2001、2-2 参照。
- ²³ 致遠海島微生、風塵末吏。
- ²⁴ 作品全体を分析するときは、女鬼と命名するが、二人が生きていた当時の状況を叙述する場面では、娘子と称する。二人の関係は姉妹で、姉は八娘、妹は九娘と命名されている。
- ²⁵ 兒與小姊、(中略)先父不爲縣吏、獨占鄉豪、富似銅山、侈同金谷、及姊年十八、妹年十六、父母論嫁、阿奴則定婚鹽商、小妹則許嫁茗估、姊妹每說移天、未滿于心、鬱結難伸、遽至夭亡。
- ²⁶ その他にも、〈崔致遠〉には、葛藤の気配が感じられる部分がある。崔致遠が二人の女鬼と別れた後、雙女墳周りをわびしく歩きながら自分を慰労するために作った長詩があるが、その次の部分で“浮世榮華夢中夢 白雲深處好安身”と詩を吟ずる。この世の榮華は夢みたいなので、自分はこの世を捨てて白雲深處で生涯を終えようとするのは、その因果関係に整合性がある。このような結論を下るまで、人物が経験しなければならなかった深刻な葛藤状況を押し量ることは難しくない。しかし問題は、二人の女鬼との出会いと別れがこの世の榮華を夢のように認識させたという情報が、作品内的に皆無である点である。長詩とこの詩の間に“後致遠擢東還、路上歌詩云”という句節がある。長詩とこの句節の間に相当な時間的な隙間があるが、もしこの隙間にあった葛藤状況が事件として描かれていたとすれば、〈崔致遠〉は小説となる可能性が非常に高い。初期叙事の作家にとって、葛藤状況は、大切な興味の対象にはならなかったといえるだろう。
- ²⁷ 信到莊上、悅太守金听公之女、惑之深、屢就洛山大悲前、潛祈得幸。方數年間、其女已有配矣。又往堂前、怨大悲之不遂己、哀泣至日暮、情思倦憊、俄成假寢。
- ²⁸ 計活四十餘星霜、有兒息五、家徒四壁、藜藿不給。遂乃落魄扶携、糊其口於四方。如是十年、周流草野、懸鶉百結、亦不掩體。適過溟州蟹縣嶺、大兒十五歲者忽餒死、(中略)夫婦老且病、飢不能興、十歲女兒巡乞、乃爲里藜所噬、號痛臥於前、父母爲之歎歎、泣下數行。(中略)離合有數、請從此辭! 信聞之大喜、各分二兒、將行、女曰:“我向桑梓、君其南矣!”方分手進途而形開。

- ²⁹ 婦人の提案発話は、人物の内面を見せてくれる部分として認識され、〈調信〉を小説として見なそうとする研究者にとっては大切な根拠となっているが、葛藤状況を対立関係として描かず、過ぎた時間を回顧しつつ、別れに対しての当為として提示されている位である。従って、小説としての根拠よりは個人作家が創作したという徴表、つまり小説のように社会の問題地点にまではまだ目を配ることができないが、個人次元の葛藤には着目していた伝奇ジャンルの徴表として理解することがもっと適切であろう。
- ³⁰ 焦点化とは、話者と呼ばれる物語りの作品内的話者が作品で行われる事件を見つめる位置を指す‘視点’と類似な概念であるが、視点には対象に向けた認識の志向やその観察の結果を陳述する意味も含まれているので、ここでは焦点話者—初期叙事作品では叙述話者と同一—が見つめる視点と、それを通じて知覚される対象だけを意味する‘焦点化’という用語を、写真と映画の理論から借用して使う。
- ³¹ 韓龍煥、『小説学辞典』、高麗苑、1992、410頁。
- ³² 韓国初期叙事作品の話者の焦点は、主人公から離れることはない。二つ以上の焦点化対象が現れるのは、15世紀の〈李生窺牆傳〉から始まる。
- ³³ 一般的な意味での距離とは、疎通主体の間の密着されている程度を指す。しかし、ここでは密着の程度よりただ時・空間上の物理的な距離を意味する概念として使う。
- ³⁴ 例として、次のような部分が挙げられる。“崔致遠、字孤雲、年十二、西學於唐、乾符甲午、學士裴瓊掌試、一舉登魁科、調授溧水縣尉。”
- ³⁵ 本格的な叙事が展開される以前に、主要人物についての情報が要約提示される様式が、叙事作品の一つの技法として朝鮮時代の後期まで繋がっていくことを考えてみると、話者が主要人物の情報を一方的に要約提示してくれる様式を、韓国叙事における一つの技法として認めることができると思う。
- ³⁶ 例として次のような部分が挙げられる。“嘗遊縣南界招賢館、館前岡有古塚、號雙女墳、古今名賢遊覽之所、致遠題詩石門曰：（中略）致遠見詩、不覺垂淚、二女謂致遠曰：“倘或他時、重經此處、修掃荒塚。”言訖即滅。”
- ³⁷ ここでの小説は、小説一般ではなく、主に韓国の古典小説を指す。
- ³⁸ このような焦点化対象の固定は、〈調信〉と〈金現〉でも同様に現れている。作品の質量を考慮し、分析は〈崔致遠〉だけを対象に行う。
- ³⁹ 本稿の対象作品をはじめ、伝奇または伝奇小説と称されている多くの韓国の初期叙事作品は、自分の能力についての認定を渴望する、士大夫文人知識人層の夢と願望を反映するジャンルであると考えられている。主人公は、即ちその作家層の渴望を遂行する主体であると考えても良いだろう。尹在敏、「伝奇小説の人物性格」、『民族文化研究』28、高麗大校民族文化研究所、1995、64頁。

〈参考文献〉

- 金賢陽 外、『殊異傳逸文』、博而精、1996。
- 金賢陽、「〈崔致遠〉のジャンル性格の論議についての批判的検討」、『韓國古典小説史の據点』、보고사、2007。
- 朴逸勇、「小説史の起点とジャン性論議の成果と課題」、『古小説研究』24、韓國古小説学会、2007。
- 朴熙秉、「韓國傳奇小説の美學」、돌베개、1997。
- 蘇仁鎬、「羅末—鮮初の傳奇文學研究」、高麗大博士學位論文、1996。
- 蘇仁鎬、「高麗時代の傳奇の類型と史的展開様相」、『崇實語文』14、崇實語文學會、1998。
- 尹在敏、「伝奇小説の人物性格」、『民族文化研究』28、高麗大校民族文化研究所、1995。
- 尹在敏、「傳奇小説の性格」、『韓國漢文學研究』學會創立20周年紀念特輯號、韓國漢文學會、1996。
- 李大炯、「金鰲新話の敘事方式の研究」、延世大博士學位論文、2001。
- 一然著、李民樹訳、『三國遺事』、乙酉文化社、1992。
- 林榮澤、「羅末麗初の傳奇文學」、『韓國文學史の視角』、創作斗批評社、1984。

張孝鉉、「傳奇小説研究の成果と課題」、『民族文化研究』28、高麗大民族文化研究所、1995。
池浚模、「傳奇小説の嚆矢は新羅にある—「調信傳」を解剖する—」、『語文學』32、韓國語
文學會、1975。
崔在佑、『企齋記異の特性と意味』、博而精、2008。